

## 立命館大学グローバル・イニシアティブ外部評価報告書

I 立命館大学グローバル・イニシアティブ外部評価委員会 開催概要	
1. 開催日	2016年10月7日(金)
2. 外部評価委員	(アルファベット順) Jeremy Breaden 様 (Senior Lecturer in Japanese Studies, Monash University) 森川 典子 様 (ボッシュ株式会社 取締役副社長) 太田 浩 様 (一橋大学国際教育センター 教授)  佐藤 隆 様 (京セラ株式会社 執行役員上席 人事総務本部長)
3. スケジュール	9:30 - 11:30 国際寮見学 (インターナショナルハウス大將軍) 本学学生との懇談 (日本人学生1名、留学生4名) 13:30 - 15:00 外部評価委員会 (I部) 15:15 - 17:50 外部評価委員会 (II部)、委員による講評
4. 内容	2014年度、2015年度スーパーグローバル創成支援事業 (SGU) を含む、立命館大学グローバル・イニシアティブ事業の推進に関する評価と提言

II 立命館大学 自己点検報告	
1.	立命館大学グローバル・イニシアティブの検討経緯とスーパーグローバル創成支援事業 (SGU) 構想との関係
2.	全学の国際化の取組と課題 (1) 国際化推進のための全学的取組 (2) 学生の海外派遣・留学生受け入れ増のための取組 (3) 国際化推進のための諸プロジェクト (4) 全学の国際化の取組と課題 スーパーグローバル創成支援事業 (SGU) 指標との関連性 (5) 立命館大学 2016年度スーパーグローバル創成支援事業 (SGU) 推進のロードマップ
3.	2014 (平成26) 年度、2015 (平成27) 年度の取組
4.	2016 (平成28) 年度 スーパーグローバル創成支援事業 (SGU) フォローアップ調査結果
5.	立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議、幹事会 議題一覧

### Ⅲ 外部評価委員 総評

大学全体ならびに学部・研究科単位で、教育研究における国際化を積極的に推進する姿勢は評価する。その上で次の点について指摘をする。

○大学全体としての方向性が一致しているか（目標の全学的共有）

○目標設定のあり方と実践、その評価の方法が明確になっているか

自己点検報告書から、大学全体と学部・研究科単位におけるゴールとビジョンの共有が見えづらい印象を持った。目指すべき姿の共有と具体的取り組みについて明らかにしてほしい。

例えば「留学生数」は達成度を計りやすい目標であるが、果たして目標数を達成すれば国際化は成功したと言えるのか。立命館大学ではどのような形を「成功」と認めるのか。こういった点について大学内での認識をより深いレベルで共有することが必要である。現状では学部毎の温度差が大きいという印象をぬぐえない。先ず第 1 に、この点を指摘しておきたい。

今後、目標の進捗管理とチェックの仕組みを強化し、外部評価委員会での指摘を受け具体的に着手した改善事項について、次回の外部評価委員会において確認をしたい。

「国際化をどう評価するか」は世界的に取り組まれているテーマであり、評価指標の設定は難しい。しかしながら、立命館大学がより一層国際化を推進するためには、個別学部・研究科の専門領域における国際的志向の強さのレベルに関わらず、大学が全体として「グローバル化推進」にベクトルを合わせることの必要性について、改めて認識いただくよう提言する。

立命館大学の取組が日本全体の底上げに貢献する、そのような事業推進を期待する。

### Ⅳ 個別観点に対する評価ならびに提言

#### ガバナンスについて

自己点検報告書の内容から、学部単位と大学全体がどのようにビジョンを共有しているのかが見えづらく、目指すゴールの共有について懸念が残った。個別の学部・研究科が対象とする学問領域によっては、国際化の取組み方に差が生じることも致し方ないが、スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）という大きな事業を推進するためには、より一層全学の共通理解を深めて高い次元での取組に着手してほしい。事業推進にあたっては、大学全体として、計画段階から目標達成に至るまでの進捗管理とチェックのサイクルをより明確にした制度設計が必要である。検討を要請する。

「国際化推進」のために学内の様々な構成員がアイデアを出し合い議論をし、検討するプロセスを重ねていることについては、立命館大学らしい特徴であると感じ入りながら報告を聞いた。他方、これらの議論に関わる構成員の多くが国際化に責任を与えられている人たちであり、国際化に興味のある人だけが集まって議論を交わしているようにも見受けられた。

真のグローバル化を進めるためには、現時点であまり国際化に興味を持っていない層

をも巻き込むことが重要である。留学経験を持たない学生、海外に出て行くことにあまり積極的ではない学生へのアプローチを視野に入れて、プログラムを作りあげていくことを期待する。学内の議論のあり方についても、国際化に興味の薄い層を積極的に巻き込んだ展開を期待する。

#### グローバル人材の育成について

企業においても、グローバル人材の育成はゴールのないテーマでありタスクとしても認識されている。

午前実施された国際寮の見学と学生との懇談において、国際化は施設や設備はもとより、まず「人」が大事だという事実について改めて認識したところである。懇談した学生は皆、国際化に興味があり大変意欲的な学生であったが、そうではない学生も含めた「求められるグローバル人材」の育成について更なる検討をお願いしたい。

国際化とは「国際的分野に興味のある学生にプログラムを提供すること」ではない。国際化に興味のない学生が海外への興味を持つためには、どのようなアプローチが求められているか。そのことを考えた demand と needs の創出が求められる。大学全体としての開放性、通用性、融通性をより高めるためのプログラムについて、ぜひ検討を深めていただきたい。

キャンパス内で実践が可能な国際化推進の取組に「留学生に対する理解を深める教育」が考えられる。現在立命館大学において取組まれている「教養科目 B 群」に加えて、国籍や国境を超えて交流を促進する取組をより豊富に提供することが望まれる。思い切った、戦略的な教育的枠組の創出も究極のグローバル人材を生み出すことにつながる。より多くの正課授業において、留学生どうしの交流、留学生と日本人学生の交流が促進される工夫を取り入れ、立命館大学らしさを打ち出すような取組を深めてほしい。

#### 海外派遣、留学生受入

学生間の交流が促進されるような仕組みを検討してほしい。必ずしも全ての留学生が国際的なマインドを持ちあわせているとは限らない。各人が「各国の代表」として意識を高めることよりも、国籍や国境というものを超えた関係性を構築することが重要であり、そのような視点で学生間の交流が深まることが望ましい。

学生派遣に関しては、英語力を測る仕組みは CEFR を基準とした測定に切り替えられつつあるとの説明であったが、英語力は次の 2 段階で測定するなど更なる工夫を求めたい。1 段階目は入学当初の TOEFL-ITP® 全員受験とクラス編成（注：現状で導入済）、2 段階目は、留学を考える層に対して 4 技能を伸ばすための技能テストの実施である。SGU 事業採択を受けた上では、学生の英語力を伸ばすためには今以上に具体的な手段が必要ではないか。大学院生の英語力測定も含めて検討を要請したい。

#### ローリングアドミッションの導入について

立命館大学におけるローリングアドミッションの展開に期待する。

世界標準で考えた場合に日本の大学全体の傾向として言えるのは、受験生が application を出してから合否判定までの期間が長いことである。application を出して直ぐに結果が出れば学生はアクションを起こすが、日本の多くの大学では時間がかかるた

め留学生が集まりづらい。大学教員の採用にも同じことが言える。現在の制度運用では、良い人材が他国へ取られてしまう結果を招くことになる。

今、アメリカ合衆国では **common application** が標準になっており、1つの **application** で 30 ほどの大学への申込が可能である。このような世界的な状況も睨みながら、制度設計と運用を行わねばならない。立命館アジア太平洋大学はその良い例であり、世界をマーケットに学生募集を行うことはこれからますます重要になってくる。立命館大学にはスーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）の数値目標（数字）の追求のみに専念するのではない、大きなゴールの設定と制度運用の追求を期待する。

#### 大学院教学の国際化について

今回の報告からは、大学院教学の国際化に関する内容を十分に読み取ることが出来なかった。グローバル化の目的の1つは立命館大学の国際的評価を上げることであり、そのためにも大学院教学についての検討をより深める必要がある。大学院教学の国際展開について戦略的に取りあげ、より積極的な研究成果の発信を行うことを提言する。

### V 外部評価委員からの提言を受けた立命館大学の回答

#### ガバナンスについて

グローバル化を巡るビジョンが大学全体として共有されているか、各学部・研究科の問題としてとらえられているかという質問に対して、本学はこの間国際化の取組を積極的に進めてきたものの、グローバル・イニシアティブは大学の全構成員が関係している極めて大きなプロジェクトであることから、現在はこの計画の全学的共有を図っている段階にあると認識している。以上の状況からも、この度外部評価委員から「共有のされ方が十分に伝わってこない」との指摘を受けたことについて、重要な課題として認識する。

立命館大学の国際戦略上は、スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）を柱に学部・研究科や部門がそれぞれ目標を設定し達成することによって、本学が達成すべき高い目標も達成されるという関係性を基盤としているため、今以上にその内容を明確にすることが必要である。本学は 14 学部 20 研究科を擁する大規模大学であるが、学部・研究科の枠組みを超えた発展性ある取組の検討を進めやすい風土にあると自覚している。その強みを活かし、立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議において目標と課題のさらなる共有化を行うとともに、本学の取組が日本国の高等教育の高度化と、高度人材育成輩出の牽引へとつながるといった認識と意欲のもとに、国際化推進の課題に取り組む。

#### グローバル人材の育成について

現代社会において求められるグローバル人材の育成について、国籍や国境を超えて留学生と日本人学生が共に学ぶ科目提供が重要という意見については、指摘の通りであり、本学が開講する「教養科目 B 群」が該当する。同科目群では一定水準の TOEFL®スコアを求めているため、受講登録段階で対象者が限定されてしまうといった課題を抱えてい

るが、今後このような科目を豊富化、充実化させるためにも、英語力の異なる学生をどのように混ぜるかといった諸課題について実践を積み重ねている段階である。

現在の語学レベルに依らずグローバル化につながる授業に出席することによって、学生自身が「やはり語学力は必要だ」と感じる事が何よりも重要だと認識している。正課、課外を問わず、今後とも積極的に学生が海外に出て行く意欲を高めるためのきっかけ作りや機会を創出する。

#### 海外派遣、留学生受入

学生間の交流を促す施設として、キャンパス内に”Beyond Borders Plaza”の開設を予定している。留学生どうしの交流、留学生と日本人学生の交流がより深まるためのソフト面について、現在検討を深めているところである。

留学生の受入については、海外の協定先大学との間で協定の柔軟化を図り、学生の交流協定が将来に亘って長く続く仕組みへと運用変更を行った。本学独自の受入の他にも、日本の他大学と協力して、海外からの学生を双方の大学で受入れる制度の運用も開始しており、国全体の留学生受入増にもつながる取組みに着手しているところである。

英語力を測る仕組みは、CEFRを基準に切り替えつつある。入学当初はTOEFL-ITP®の全員受験を実施しているが、4技能を伸ばすことを目的としたテストの積極導入など、留学を目指す層に対して英語力をさらに向上させる取組みを進めたい。大学院生の英語力測定についても実現の可能性を含めて具体的な議論を進める。

現在各学部の英語教員を中心に、英語教育の獲得目標に関する議論を深めている。外部評価委員からの提言についても、その必要性を十分に認識して取組を進める。

#### ローリングアドミSSIONの導入について

これから本格的な着手に入る段階である。同制度を導入する前提として、委員から発言のあった合格設定基準の確認と合意、入試の実施体制などの点は、正に課題として認識している。本学では、既に学部単位での先行実施例（国際関係学部、政策科学部）があり、この経験の積み重ねを立命館大学全体におけるローリングアドミSSION導入へとつなげたい。

#### 大学院教学の国際化について

国際化を積極的に推進する上で大学院教学が重要であるという点について、ご指摘の通りと認識している。大学院生が、研究者としての力を身につけながら海外に積極的に出て行くことについても、今後重点的に推進したい。

大学の使命として、立命館大学は研究政策に重きを置き、研究における産学連携を進めるためにいち早くリエゾン・オフィスを立ち上げるなどの取組を積み重ねてきた。研究高度化政策の下に各キャンパスに研究機構を設置している。

大学院生が積極的にプロジェクトに参入することによって、プロジェクト研究を通じた国際的ネットワークを構築するなど、現在の取組をさらに加速化させると同時にさらなる大学院教学の国際化へと繋げたい。

以上